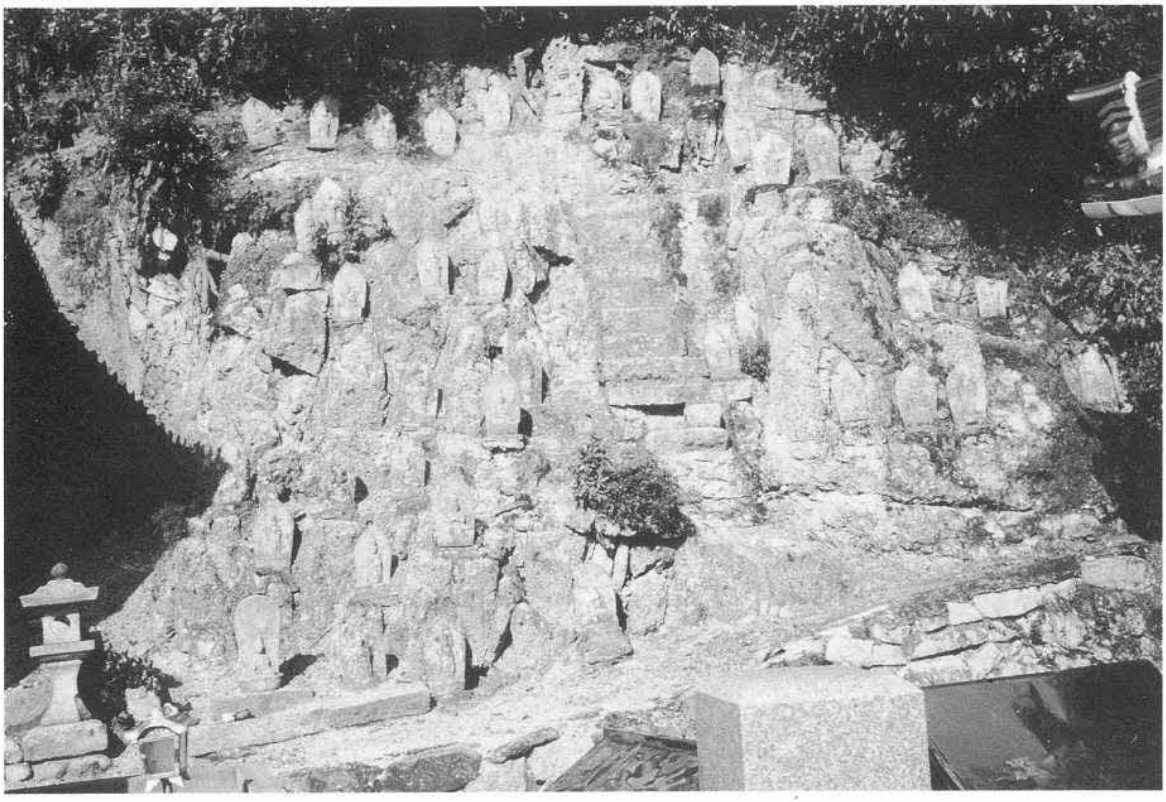
玖波地区
松ヶ原町
大竹市
飛地
松ヶ原の馬頭観音
経小屋山
経山
松地蔵
大道
玖波町
下瀬
鳴川
山陽本線
玖波の馬頭観音
神生石
木場のごりんさん
野田の六地蔵
西山社の延命地蔵
玖波の延命地蔵
称名寺の童観音
同 疣地蔵
同 六角柱上如来坐像
同 足留の地蔵
玖波 同 観音堂
玖波四丁目



称名寺の窟観音

所　在　地　大竹市玖波六丁目
彫刻の形式　舟型浮彫り
観音三十三軀（七観音）
不動明王　一軀
石の種類　花崗岩

称名寺は、中世末期天文七年（一五三八）建立され、「僧円達開基、境内に岩窟あり、石仏を置く」と文政二年（一八一九）の国郡志に記されている。

現在、この称名寺境内西側の山裾にある、三十三観音な、かつてこの寺院裏山の洞窟（奥行十一間（約一九、八m）、高さ九尺（約二、七m）、幅五尺（約一、五m））の中に、不動明王と共に祀られていた。

文化三年（一八〇六）芸州藩がまとめた、佐伯郡廿ヵ村郷邑記に「当寺中ニ穴観音有リ巌ノ穴ニ観音ヲ安置ス……」とあり、後に江戸末期から明治に入ってと推定されているが、岩穴が崩れたため現在地に掘りだし祀られた。

仏には、如来、菩薩、明王、天の順位があり、不動明王が三十三観音菩薩群の中央頂点におられるのは不自然だが、三十三観音菩薩を高いところからお守りしている形態になっている。

疣（いぼ）地蔵

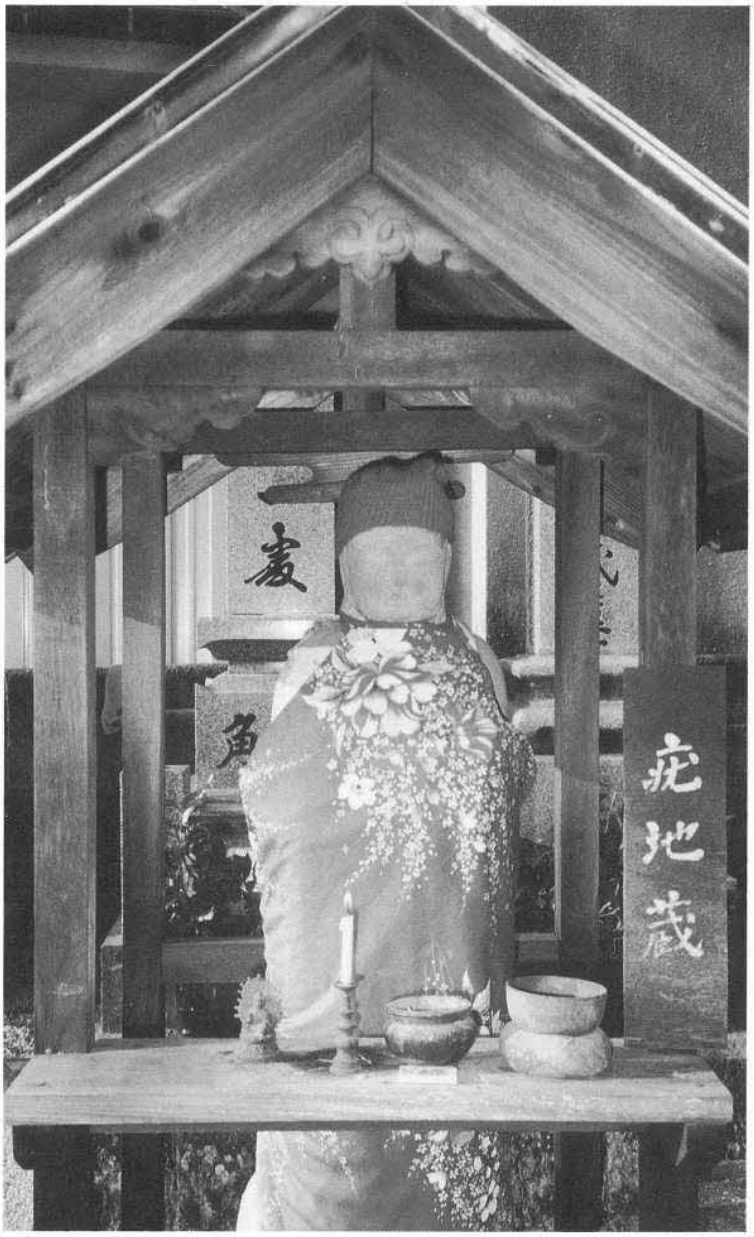
所在地　大竹市玖波六丁目
像高　九十一㎝
彫刻の形式　丸彫り立像
石の種類　花崗岩

称名寺境内の、墓地中央に位置しているこの地蔵尊は、正面台座に「法界萬霊」を刻み、「享保六年（一七二一）辛丑九月三日離月永心信女」とあり、隣の墓石の中に同名のものがある。保六年辛丑九月三日離月永心信女」とあり、隣の墓石の中に同名のものがある。

死者の供養塔として建てられたものであろうが、後に疣地蔵として現世に生きるものの痛みを除いてくれる地蔵信仰に変化していったものと考えられる。地元の人たちは、「どんな疣でも拝めば自然に落ちる」といわれる。

こうしたことから「疣地蔵、疣神」などの信仰が各地に生まれ、市域で二ケ所（21頁参照）ある。

今でも地元石仏信仰の人々により香花の絶えることがない。



六角柱上如来坐像

所在地　大竹市玖波六丁目
像　高　五十七㎝
彫刻の形式　丸彫り坐像
石の種類　花崗岩

この阿弥陀如来坐像は、一般信仰の対象ではないが、称名寺境内墓地の中ほどにある。六角柱の上に座っておられる姿が大変珍らしい。

台座の蓮華座が大柄で、華麗なことと、六角柱が他に類を見ない、がっちりした作りとなっているのが特徴である。

三つの面に戒名があり、梵字で「阿弥陀如来」の入った一面もある。

年号の古いものは天和三年（一六八三）と刻まれ、外に弘化三年（一八四六）八月四日及び安政五年（一八五八）の彫刻もある。

残りの三面には、「南無阿弥陀佛」の名号が入っており、江戸前期に建立されたものではなかろうか。

全体が重厚な感じのする供養塔（墓）である。

足摺り地蔵

所在地　大竹市玖波六丁目
像　高　五十四㎝
彫刻の形式　丸彫り立像
石の種類　花崗岩

称名寺境内の本堂西側にあり、石仏は新しい感じであるが、建立の時期は判らない。

足の病によく効くと、近郷に知られている。遠く県外からもお参りする人がおられるという。

御利益があって念願の足が治られた人は、草履をお礼に奉納して帰ることから、この祠にはたくさんの草履が吊されている。

如意輪観音菩薩

すべてを意のままに出来る如意宝珠を持ち、輪は煩悩を取り除く法輪を意味し、物質的にも精神的にも望みを叶えてくれるといわれる観音で、通常六つの手をもち、とても穏やかな姿の観音さんである。

称名寺の観音堂

所在地　大竹市玖波六丁目

像高　右より

□□□□観音　七十一㎝

如意輪観音　七十一㎝

馬頭観音　七十一㎝

彫刻の形式　舟型浮彫り坐像

石の種類　砂岩

称名寺境内西側の共同墓地を見おろすところに観音堂がある。

この観音堂は、文政二年（一八一九）広島藩に各村々から提出された「国郡志」その中の玖波村の項に、すでに記載されているので、古くから地域の人々によって観音信仰がおこなわれていたと思われる。

本尊は、聖観世音菩薩（木像）である。その堂内右に舟型浮彫り坐像の観音菩薩別石三軀が祀られている。

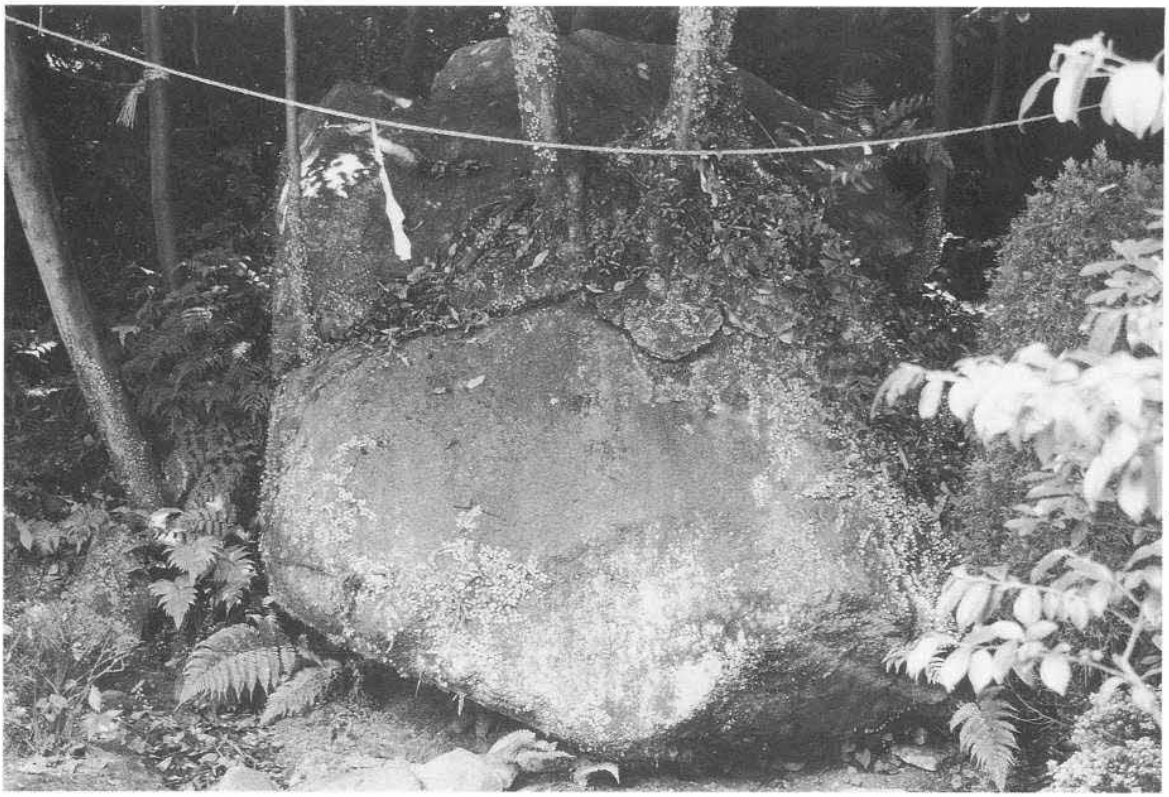
きめ細かく作り上げたこの仏像は、造形的にも極めて優れたものである。

馬頭観音菩薩

もともとヒンズー教の最高神の一つで、ビシュヌ神が馬頭に化身して敵を倒したという神話からきたものである。

頭の上に馬頭を載せた観音で六観音の中で一番きびしい顔をしている。

交通に深い関係をもつ菩薩とされている。



神生石（みあれいし）

所在地　大竹市玖波五丁目
自然石　縦　約四m
　　幅　約二m六十cm
　　地上部分の高さ一、三m
石の種類　花崗岩

玖波地区の氏神である大歳神社は、主祭神大歳神（須佐之男神と神大市姫の御子で、正月にお迎えする歳神、農業の神）を祀る。

その境内の左側奥に、「神生石(みあれいし)」と書かれた標石が立ってある。その前方、神社本殿の横に大きな石が座っている。

横一文字の石の割れ目には樹木が生えており、注連縄が張ってある。

大歳神社の御鎮座年代は不詳だが、古代信仰において山・樹木・石などを神が宿った存在として崇めており、この石も信仰の対象として崇拝され、後にその横に御神殿を建立したものと推測されている。

この「神生石」は、文政二年（一八一九）の「国郡志書出し帳」に記されている。

市域では、この種の磐（いわくら）はここだけである。

野口の六地蔵

所在地　大竹市玖波五丁目
像　高　六地蔵共六十四～六十七㎝
　　中央地蔵菩薩丸彫坐像六十五㎝
彫刻の形式　丸彫り立像
石の種類　花崗岩

野口の地名は古く、玖波五丁目の広島～岩国道路が横断するあたりを言う。

北側の山裾を約百ｍほど登ったところに、昭和五年頃から使用されてきた火葬場の跡がある。使われなくなってからは荒れはてて、六地蔵だけが残っていた。長い間放りっぱなしになっていたため、六地蔵は痛々しい姿となっていたが、現在では真言宗寺院の信徒の手により、温かく管理されている。

中央に座った地蔵菩薩が位置し、左右に三軀ずつ立像の六地蔵がおられる。

桜地蔵

所在地　大竹市玖波町大迫
像　高　五十九㎝
彫刻の形式　丸彫り立像
石の種類　花崗岩

県道大竹～佐伯線玖波大迫の道路脇に祀られているこの地蔵菩薩は、佐伯八十八ヶ所第七十九番霊場として順拝者が訪れる。昭和二十年代頃まで山間部地域に伝わった風習で、村内に結婚式があると、お嫁さんの腰が座るようにとその家の庭にお地蔵さんを担ぎ込み、並べてお祝いをした。

目出度く結婚式が終わると、夫婦して元のところへお返しに行く。時に間違えて戻すこともあれば、地蔵さんが損傷することもある。

この桜地蔵も、いちばん弱い首がとれていて、考えごとをするように小首を傾けておられる。

玖波の延命地蔵

所在地　大竹市玖波三丁目
像　高　四十六㎝
彫刻の形式　丸彫り立像
石の種類　花崗岩

かつて、西国街道を西に下って芸州最後の宿場町が「玖波宿」であった。大野村境の鳴川を渡り、石畳道・鉾ノ峠を登ると一里塚があったといわれる。そこを過ぎ馬だめしに登ると、ここから宿場が一望できる。

「延命地蔵」は、かってこの馬だめしにおられたという。現在の「玖波隧道」の上にあたる。

この地蔵さんは、大変現世の人々の悩みをよく聞き、御利益を与えられ、特に耳の病に悩む人を救けられるという。

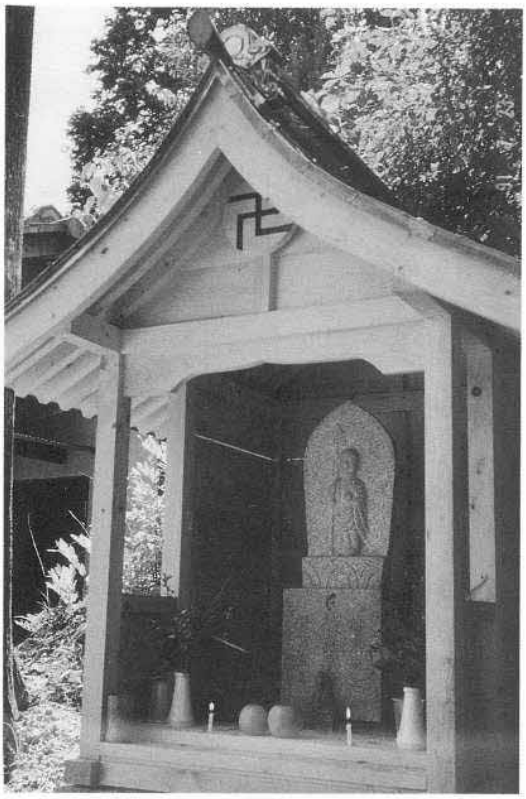
佐伯八十八ヶ所第五十九番霊場で、玖波地区でもっとも多くの信者があり、近郷からもお参りがある。

お祭りは、毎年八月二十四日。昔は、地蔵さんに掛けた前掛けを継ぎ合わせて天幕のようにし、その下で御詠歌をうたったといい、大変な人気であったことがうかがえる。

お祭りには、地蔵盆踊りが行われ、多くの夜店も出て、夏の夜の賑わいを今も残している。

西山社の延命地蔵

所在地　大竹市玖波五丁目
像高　五十㎝
彫刻の形式　舟型浮彫り立像
石の種類　花崗岩



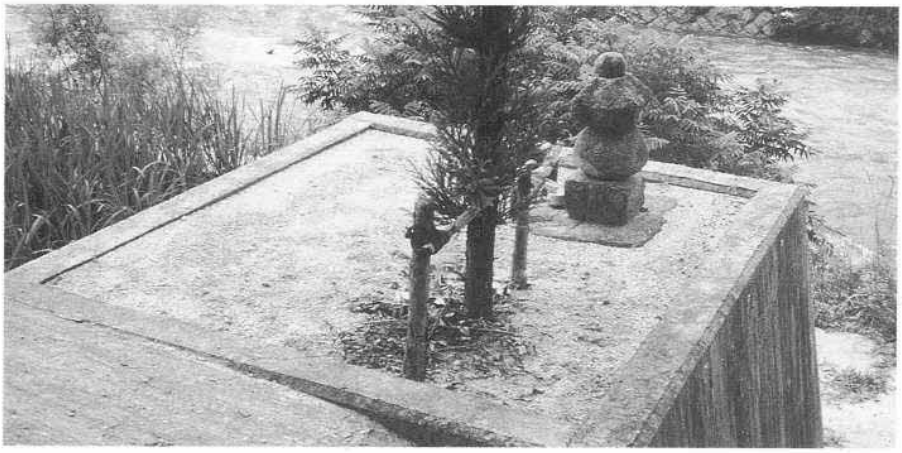
玖波五丁目大竹新生病院入り口を左に約二百m登ると、偏額に「西山社」と書かれた石の鳥居がある。ここが行者山への登山口である。

この境内左側に、延命地蔵尊が祀られている。

平成三年、地域の人たちにより立派な祠が再建され、今日なお遠くからも参拝する信者が絶えない。

木場（こば）の「ごりんさん」

所在地　大竹市玖波六丁目
塔高　六十㎝
彫刻の形式　五輪塔
石の種類　花崗岩



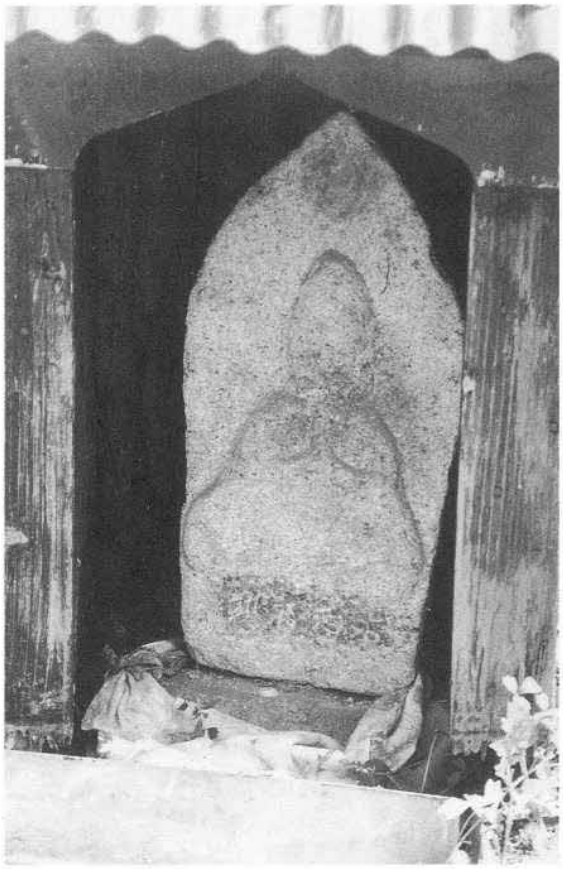
玖波の西寄りを南に流れ、瀬戸内海にそそぐ恵川、その河口から約一㎞上流左側に、玖波の氏神、大歳神社が鎮座する。

その対岸の田圃、川寄りの一角約二、三㎡（一坪）の地に、塔の一部を欠く五輪塔がある。

これは以前ここより約二十m東の方、県道の脇にあったもので、いつの時代のものか判らないが、土地の人々は「ごりんさん」と呼び、神様として崇め、榊を供え灯明をあげて参拝していた。

ところが、去る年、県道改修工事に支障をきたし、県がその処置に困惑していたとき、近くの土地所有者の篤志を得て、現在地に移したものである。

今も近隣の人々の参拝が絶えない。



玖波谷の馬頭観音

玖波の馬頭観音
所　在　地　大竹市玖波六丁目
像　　高　四十九㎝
彫刻の形式　丸彫り坐像
石の種類　凝灰岩

松ケ原の馬頭観音
所　在　地　大竹市松ケ原町
像　　高　四十一㎝
彫刻の形式　丸彫り坐像
石の種類　花崗岩

奥地から玖波の港に通じる玖波谷道の歴史は古いが、この道は、現在も栗谷・佐伯町を結ぶ主要道路に変わりはない。

かつては、松ケ原から「馬ケ峠」を越え広原・谷尻へと通じるとともに、佐伯町津田・玖島方面を結ぶ生活道で、馬の背を借り、または馬車で、玖波への荷物の往来が盛んであった。

急な坂道あり、谷ありの大変な難所で、馬が荷ごと谷に転落するようなことが度々あったことから、「馬頭観音」が建立されたといわれる。

玖波の観音については、いつ頃建立されたか定かでないが、松ケ原の馬頭観音は、明治に入って地元の「木元万吉」という人により祀られたものである。